コメント１：上村忠男

近代世界を学問の分野から支え導いてきた諸科学はいまや全般的な危機に陥っているのではないか。ーーこのような疑問を根底にかかえながら、近代ヨーロッパにおける諸科学の成立根拠についての批判的考察の仕事に着手して、すでに五十年近くになります。わたしの学者的人生の大半はこの問題の探求に費やされてきたと言っても過言ではないでしょう。

その間、水先案内人（cicerone）を務めてくれた思想家の数は十指に余ります。が、なかでも魅了され、すっかり虜になってしまったのは、ほかでもないヴィーコでした。とりわけ「学識の錯誤」（dotto abbaglio）ないし「学者たちのうぬぼれ」（boria de’dotti）にたいするヴィーコの自戒をこめた批判からは示唆されるところが少なくありませんでした。このヴィーコの批判のうちには学的な世界把握一般にはらまれる理性主義的錯誤の危険性についての透徹した自覚があるものとわたしは受けとめたのでした。

そのヴィーコについて、これまでわたしはささやかながらも考察の成果とおぼしきものを『ヴィーコの懐疑』（*The Doubt of Vico*）（東京、みすず書房、１９８８年）と『バロック人ヴィーコ』（*Vico and the Baroque*）（東京、みすず書房、１９９８年）、それに『ヴィーコーー学問の起源へ』（*Vico: genesis of the sciences*）（東京、中央公論新社、２００９年）の３冊の本にまとめて公刊してきました。また、同時に、『われらの時代の学問方法について』（*De nostri temporis studiorum ratione*）、『イタリア人の太古の知恵』（ *De antiquissima Italorum sapientia*）、『新しい学』（*La Scienza nuova*）１７４４年版、『自伝』（*Vita di Giambattista Vico scritta da se medesima*）の翻訳も手がけてきました。この間の経緯については、Tadao Uemura, “Giambattista Vico in the Crisis of the European Sciences,” in: *Vico e l’Oriente: Cina, Giappone, Corea,* a cura di David Armando, Federico Masisi, Manuela Sanna (Roma, Tiellemedia, 2008), pp. 163-179 をご覧になってください。イタリア語ヴァージョンは *Bollettino del Centro di Studi Vichiani*, anno XXXVIII (1/2008), pp. 123-139 で読むことができます。

ところで、わたしがヴィーコを主たる参照基準にして近代ヨーロッパ的な諸科学のありようにかんする批判的考察に取り組んでいた時期は、あたかもヴィ

ーコ生誕三百年にあたる１９６８年を機に、イタリアだけでなく、ドイツやアメリカ合衆国でも、あらためてヴィーコへの関心が急速に高まりつつあった時期でもありました。そして、この国際的な規模における《ヴィーコ・ルネサンス》のなかでの議論からはわたし自身多くの示唆を得てきました。なかでも、アメリカ合衆国で New School of Social Research のジョルジョ・タリアコッツォ Giorgio Tagliacozzo が中心となって組織したシンポジウムでは、「ポスト・モダン」ないし「ポスト・ウェスタン」にまつわる諸問題とのかかわりでヴィーコの意義について再考してみようとの姿勢が鮮明にうち出されていて、共感するところが少なくありませんでした。

ただ、そもそもロシア語が読めなかったということもありますが、ロシアでもかねてよりヴィーコへの関心が存在しており、研究の蓄積もあるという事実については、寡聞にして存じ上げませんでした。

したがって、このたびモスクワでヴィーコにかんする国際会議が開催されることになったので参加してほしいとの要請を共同主催者の Fabrizio Lomonaco 教授から受けたときには、正直に言って驚かされました。しかし、会議での報告とそれらをめぐっての討論はなかなか充実しており、参加できたことを心から喜んでいます。会議の Proceedings が刊行され、それを読んだロシアの青年たちのあいだでヴィーコへの関心が高まることを願っています。

最後ながら、会議を組織してくださった Julia Ivanova 教授のご尽力に敬意を表させていただきます。またロシア語を解せないわたしども家族のために通訳と観光案内役を引き受けてくれた佐藤貴之くんと Anastasia Shalaeva さんにも感謝します。